

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

橋下大阪市長の教育ナラティブの批判的談話分析： ナラティブを成り立たせているディスコースの前提 と排除

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朴, 育美 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/5733

『橋下大阪市長の教育ナラティブの批判的談話分析』 —ナラティブを成り立たせているディスコースの前提と排除—

外国語学部准教授 朴 育美

1. はじめに言語ありき

批判的談話分析を使って、ナラティブ分析をするにあたり、その理論枠組みの出発点ともいえる構築主義¹の言語観を再確認するところからはじめたい。構築主義が依拠する、言語論的転回²は、言語に先立つ思考や主体概念を問題視する。つまり「人間主体、意識というものがまず存在し、それが言語を媒介に、考えを伝達する」という従来の情報伝達モデルを否定する。「意識と言語は同年齢³」というのは、マルクスの言葉であるが、言語論的転回は、意識がまずありきなのではなく、言語のないところには、意識も思考もないことを指摘し、主体の起源、主体と一体化されてきた思考や意識の起源を問う。

言葉はふつう、はじめの「言わんとするところ」のありのままを記号として代行するのだと見なされる。しかし、そもそもこの「言わんとするところ」は言葉によって編まれているのだ⁴。

言語論的転回以降の構築主義のパラダイムにおいて、ミッシェル・フーコー⁵は、主体 (subject) は、言説に従属 (be subject to) することによって、言語的に構築されたものだ⁶と指摘し、アンダーソン⁶は、私たちが生きている世界を「想像の共同体」(imagined community) と表現した。また、フッサール (1959-1938) やゴフマン⁷は、主観世界を超えて自己が他者と関わりあえる拠り所を「間主観性」という概念で説明したが、これらの知見は全て、言語と主体、他者と世界の分離できない関係性を明らかにしているだろう。言語ありきの世界に生れるわたしたちは、言語を習得し、言語秩序を内面化することで人間主体となり、言語を介して世界をとらえ、他者とつながる。

ウィトゲンシュタインは、『論考⁸』で、主観世界であれ、客観世界であ

れ、世界とは、すべて言語を介在したものであり、わたしたちは「言語の世界」の外に出ることができないということを、また『探究』の言語ゲーム一元論⁹の世界では、「わたし」が言語を媒介に語るのではなく、言語が「わたし」を通じて語るという、主体とは、言語ゲームの語り手に収斂されるような存在であることを指摘した。わたしたちは、自分に属すると思われるもの（例えば、感覚や感情、思考）も言語を通して知覚し、それを表現するときも、言語という他者を介在させるしかない。「わたし」を起源とするような、私的言語は存在しないのだ。このような知見に立つとき、わたしたちが自主的に、自由に生産しているのとらえてきた語り（ナラティブ）の自律性、能動性は疑問にふされる。

言語論的転回、構築主義を経由する批判的談話分析は、ナラティブが、言語の秩序に従うことで構築されたものであり、間主観的言語空間であるディスコースにその意味を依存する、というナラティブの受動性¹⁰に焦点をあてる。「わたし」は自由に語っているのか、それとも言葉の世界の秩序であるディスコースが、次に発せられる語りの可能性を限定し、わたしたちは、その限られた選択肢の中から、次に語るべきことを選んでいるだけなのか。

この論考では、ナラティブとディスコースの相互依存的関係を明らかにするフェアクラフ¹¹の批判的談話分析のアプローチから、大阪市長の橋下徹氏の教育に関するナラティブを分析する。ナラティブを個人に帰するものとして分析するのではなく、ディスコースとナラティブの弁証論的關係に焦点をあてることで、橋下氏のナラティブを成り立たせている、日本社会のディスコースの秩序や前提を明らかにする。

2. 批判的談話分析の意義 —従来の談話分析と何が違うのか—

通常、相互行為の社会言語学における談話分析とは、言語使用を社会的相互行為と見なす観点から記号作用の役割を記述しようとするアプローチである¹²。そこでは、言葉の意味や解釈が、一つのテキストを超えて、そのテキストを取り囲む社会的文化的コンテキストの中で解釈される¹³。分析ツールには、会話者が依拠している認識の枠組みであるフレーム、会話の相手に対

する位置づけや態度であるフッティング、または、話し手の社会的アイデンティティ、参加の枠組み、ジャンル、スタイルなど様々なものが用いられる¹⁴。

確かに、批判的談話分析も、様々なナラティブ（会話、スピーチ、インタビュー、書かれたメッセージなど）を社会的相互行為とみなし、よりマクロな社会的文化的文脈の中から、テキストを分析しようとする点において、従来の談話分析アプローチと立場を共有する。しかし、批判的談話分析は、「事実の客観的記述だけでは不十分である」という問題意識を持つ点において、従来の談話分析とは一線を画す。

批判的談話分析を理論化したフェアクラフは、ディスコースをテキストの生産、解釈の相互プロセスを社会的に条件づけるコンテキストまで包括した「社会的実践」としてとらえ¹⁵、語りというものが、ミクロなレベルの文脈だけでなく、ディスコースというマクロな文脈を離れては生産、解釈できないことを指摘し、ナラティブとディスコースの相互依存性を指摘した。ただし従来の談話分析が、記号作用の役割や言語使用の語用論的秩序を“客観的立場から”記述することを目的とするのに対して、「社会実践における記号作用の役割を当然視することはできない。その役割は、分析によって突き止めなければならない」という批判的目的、問題意識を持つ。

フェアクラフは、テキスト、ディスコースと社会的出来事の弁証論的關係（例えばテキストは戦争の開始を可能にし、教育の変化や労使関係の変化を可能にし、また社会的出来事がディスコースやテキストを生産する）を考察しながら、ディスコースというものが決してニュートラルなものではありえず、ヘゲモニーを獲得した特定の価値観が、普遍的なものとして前提されていることを指摘し、そこにイデオロギーの問題を見る。

ある特定のアイデンティティや利害や表象が、ある条件下で、どのようにして普遍的なものとして主張されるのかという問題である。この主題はヘゲモニーの問題、つまり特定の社会集団の社会的な支配の確立や維持や論争に関する問題の枠組みに入れることができる。ヘゲモニーを獲得するということは、ある特殊な事項を普遍的なものとして提示することにある程度は成功するということを意味するのである¹⁶。

近年では、『新資本主義¹⁷⁾』の変容に対して倫理的、政治的問題を提起する立場を明確化し、新資本主義における言語をテーマに、新資本主義の価値観がディスコースにおいて普遍的価値となり、それを前提に、様々なテキストが生み出され、それによってまた、新自由主義の価値観が普遍化していくプロセスを批判的に検証している。そして、新自由主義における価値観が普遍的なもの、望ましいものとして、ディスコースの中でヘゲモニーを獲得し、明示的に暗示的に、普遍化され、無意識化されている現状に、警笛を鳴らしている。

フェアクラフの、このような批判的談話分析の視点は、一つの政治的立場であり、真実を明らかにする分析は、あくまで中立的な立場でなくてはならない、という批判があるかもしれない。しかし言語論的転回を経た今、主体も世界も、言語的に構築されるということ、私たちが言語に内在的にあるということが明らかにされ、普遍的客観性というものが否定される世界で、言語の使用に、誠実に対応する最善の方法とは何だろうか。

それは、まず、自分が価値中立的な客観的立場をとりえる、という幻想を諦め、主観であれ、客観であれ、世界の認識というものが、言語の秩序という、なにがしかのバイアスを経由せずには成り立たないということを理解することではないか。

フェアクラフは、「分析者の主観によって『歪められる』ことなく、テキスト内に『存在する』ものを純粹に描写する分析をテキストの『客観的』分析と呼ぶならば、そのようなものは存在しない¹⁸⁾」と述べているが、その上で、なおディスコースのバイアスに向き合い、それを明らかにしていこうとする態度に、批判的談話分析の倫理があるのではないか。「真実とは偏っているもので、人がある立場をとったときにだけ近づける、だからこそ普遍性をもつ¹⁹⁾」ものなのかもしれない。

この論考では、教育にまつわる橋下氏のナラティブを批判的談話分析しながら、日本社会のディスコースにおいて、いかに新自由主義の価値観が、前提され、普遍化されているかを明らかにしたい。橋下氏のナラティブで、明示的に語られた新自由主義の価値観を正面から分析するのではなく、氏のナ

ラティブを成り立たせている前提に注目することで、言語使用にあらかじめ織り込まれた、新自由主義の価値観を顕在化させる。前提とは、言語的に構築された、語り手と受け手にあらかじめ了解されている共通認識であり、ディスコースの枠組みや秩序として不可視化されているものである。一見、客観的に見える言葉の使用に、ヘゲモニーを獲得した新自由主義の価値観が普遍化されているのを顕在化させることは、議論以前に排除されてしまった可能性に目をむけることでもある。語られたもの（ナラティブ）から、語られなかったもの（ディスコースの前提）を顕在化させることで、ディスコースに織り込まれた、無意識の前提や価値観を明らかにしたい。

3. 分析ツールとしての前提

批判的談話分析の分析ツールには、名詞化、モダリティ、メタファー、丁寧さ、言い回し、正当化、等価性と差異、対話性、前提、埋め込み、など様々なものがあるが、この論考では、その中でも「前提 (assumption)²⁰」を主な分析ツールとしてナラティブを考察する。前提とは、当然のこととして語られなかったことであるが、その語られなかったことが、語られたことに意味を持たせているという点で、注意が払われなければならない。前提は、語り手と受け手を結び付け、ディスコースの秩序や枠組みとして、個々のナラティブを成り立たせているものである。語られなかった前提を考察することは、暗黙のうちのディスコースの了解を明らかにすることであり、当然視されているディスコースの価値観（ヘゲモニー）を相対化する契機となるはずである。

フェアクラフは、ある表象がディスコースにおいて、どの程度のヘゲモニーを獲得しているかに関して「対話性」という分析ツールを使い、それを図式化している。そして、対話性が高い順に、帰属が明示された引用、モダリティ化された言明、モダリティ化されていない言明、そして対話性が一番低いものとして、前提をあげている。例えば「グローバリゼーションは、負担を要する過程であり、しばしば痛みを伴う過程である」というテキストが、書き手の言葉としてではなく、第三者の言葉の引用として使われていたならば、

それは、受け手に対する対話性において開かれていることになる。(それが事実として了解されていない可能性が高くなる)。

また「グローバリゼーションは、負担を要する過程であり、しばしば痛みを伴う過程であるかもしれない」というモダリティ化された言明になっていれば、モダリティ化されていない場合よりも、対話性に開かれていることになる(ディスコースにおいて事実として了解されていない可能性が大きくなる)。反対に、このテキストを前提として、「グローバリゼーションは、負担を要する過程であり、しばしば痛みを伴う過程である」「だからそのための対策を至急考えなければならない」といったテキストが続くならば、「グローバリゼーションは、負担を要する過程であり、しばしば痛みを伴う過程である」という命題が既成事実であるように扱われており、対話性は最小ということになる(ディスコースの中で事実として了解されている可能性が高い)。このように、「前提」は、テキスト生産において、最も対話性に閉じた、ヘゲモニーを獲得した表象の形であるといえる。

フェアクラフは、前提を、存在の前提、命題の前提、価値の前提の3つに分類しているが、まず、存在の前提とは、あるものが存在するということを前提することである。例えば、「いじめられている君へ」「いじている君へ」「いじめを見ている君へ」というテキストに前提されているのは、いじめられている主体といじている主体、それを見ている主体という、3つの存在である。このようなわかりやすい分類化は、議論のスタートとしては不可欠かもしれない。しかし、そのような言葉使いを何の躊躇もなしに、前提として見過ごしてしまうことには警戒しなければならない。なぜなら単純な分類化は、状況によっていじめる側になったり、いじめられる側になったり、傍観者の立場になったりするダイナミズムや複雑性、またいじめるという心理が、特定の人にむすびつけられるような形で存在するものではないといった議論を排除しかねない。もちろん、言葉は差異の体系である以上、言語使用には排除がつきまとう。しかし、わかりやすい言葉使いをすることで、無意識に排除してしまうものに、わたしたちは常に自覚的になる必要があるだろう。

次に、命題や価値の前提がディスコースの了解事項になっている例をあげてみる。近年よく見聞きする「来るべき法化社会」といった名詞化された表象であるが、一見ニュートラルに見えるこのテキストには、「法化社会」というものが実態のあるものとして、存在するということが、またそれが来るという命題が、当然の事実として前提されている。また、「来るべき」という表現は、それが来ることが望ましい、また、来ることが自然な時代の流れであるといった価値の前提も含まれているが、それを可能にするのは、「法化社会」をポジティブにとらえるディスコースの了解である。このように私たちが何気なく使う言語使用には、様々な前提が含まれており、それはいつの間にかディスコースに忍び込んだ価値観に支えられ、また同時に価値観を生み出し、補強していく。論考では、橋下氏の教育にまつわるナラティブを、ディスコースの前提に焦点をあてて考察することで、日本社会のディスコースで、新自由主義の価値観が、ヘゲモニーを獲得し、無意識に語り手、受け手、双方の思考枠組を方向づけている一面を明らかにしたい。

4. データ

データとしては、朝日新聞で、2012年4月18,19,20日に連載された、『選ばれない学校は退場「ユーザー視点」の橋下教育改革』に掲載された、教育問題にまつわる橋本氏のナラティブを使用する。『橋下語録²¹』が出版されるなど、良きにつけ、悪きにつけ、大変注目度の高い語り手である。

政治家がマスコミを通して発信するナラティブは、通常、不特定多数の有権者や国民にむけられたもので、聞き手との結びつきを強く意識したものであると考えられる。多くの支持を得ている橋下氏のナラティブも、日本社会のディスコースの前提や秩序を十分に意識し、踏まえたものと考えられる。ナラティブそのものではなく、そのナラティブを成り立たせている前提を考察することで、教育にまつわる日本社会のディスコースで、今何が前提とされ、どのような価値観が客観的、普遍的な善として受け入れられているのか、何がア prioriに排除されているのかを顕在化させる。

5. 分析と考察

1) 「行政サービスがいいか悪いかなんてサービスを受ける側が判断するしかない。保護者、有権者の判断に原則委ねる。これは僕の哲学」

=2012年2月22日、大阪市教育委員との意見交換会

一見当たり前に見える行政サービスと教育の結びつきであるが、このような結びつきは決して普遍的なものではない。学校教育は行政サービスのひとつであり、「いいか、悪いか」の二分法でふりわけられ、判断されるというナラティブを成り立たせているのは、市場経済の論理と倫理が、普遍的な善であり、それは教育にも適用することができるというディスコースの前提である。行政サービスに縮減された学校の存在価値は、「選ばれるか否か」という「客観的」なものさしで判断されるとする前提では、保護者は消費者の役割に縮減され、ひとつの同じ価値観を持つグループのように扱われ、その中にある多様なニーズや差異は隠ぺいされる。

2) 「選ぶ権利」に上回る価値はない。〔学校選択性を導入すれば〕地域が崩壊するというが、選択される地域になればいい。行きたくない学校に無理やり行かせるのは上から目線だ。」 = 2012年3月1日、大阪市議会代表質問

3) 「〔学校が生徒に〕選ばれていないという事実は非常に重い。行政というのはそこが抜けてしまって、特性だとか効率の役割だとかいろいろな理屈をつけて言うが、それをはるかに超える要素として、選ばれていないということを経く見過ぎだと思う」 =2012年1月30日、大阪府市統合本部会議

4) 「ある学校が選ばれないということは、他の学校が選ばれているのである。選ばれなかった学校が、自分たちには存在意義があると言い続けるのはおかしい。府立高校の定員割れした学校の役割は、選ばれた私立高校が狙っている」 =2012年2月3日、ツイッター

橋下氏のナラティブでは、「選ぶ」という言葉がキーワードとして繰り返し使われているが、「選ぶ」という言葉が前提にしているのは、「選ぶことが

できる人間」である。しかし、選ぶということは簡単なことではない。何かを選ぶということは、その選ぶ対象について十分な知識があり、また自分の選択がもたらす結果について具体的に想像することができてはじめて可能になる。「選択」という言葉を使用するとき、わたしたちは通常、「選択する能力がある人」を前提とするが、「本当にほしいものを選ぶ選択」から、「とりあえずあたえられたものの中から選ぶ選択」まで、選択にはいろいろなレベルがある。

橋下氏のナラティブを成り立たせるディスコースは、子どもに選択させることが善であるということは無意識に前提するが、自分がどの学校に行きたいか、何を学びたいかを明確に認識した上で、有意味な選択ができる子がどのくらいいるだろうか。語っているつもりが、語らされていることがあるように、選ぶことには、「選ばれている」可能性がつきまとう。選ぶという行為が、必ずしも選択できる主体を意味するわけではない²²。

選択を個人の重要な権利に据え、子どもに「選ばせる」ことを善とする新自由主義の価値観は、選べる能力を持つ主体を前提にする。しかし、私たちは常に選ぶ主体として、事象の前にあるのだろうか。構築主義の視座は、わたしたちが、社会とのかかわりの中で、文化的、社会的、言語的に構築されていくことを指摘したが、まさに教育とは、主体構築のプロセスであり、学校とは、選べる主体になるための訓練の場ではなかったか。選ぶ主体を前提にした新自由主義に依拠する教育議論では、教育とは、人生においてエンドレスに続く選択の場面で、自分で考え、選ぶ事ができるようにするためのものでもあるといった議論は排除される。

学校と同様、地域というものもまた商品のように選択の対象とされ、地域と人間が独立して存在し、私たちが主体として、自由に自分の住むところを選べる事が前提とされている。ここでも、状況とは独立した主体が前提にされているが、このような新自由主義の視点では、主体の構築性、つまり経済の計算式にはなじまない、主体と地域のつながりや、密着性、複雑性は、議論から疎外される。選ぶことは善であり、権利であるというディスコースに内在する新自由主義の価値観が、経済の計算式には縮減できない人間主体

の複雑性や歴史性を議論から排除してしまうのだ。

5) 「学校間格差はある。うまくいっている学校に生徒を移して格差をなくすというのは教育改革の目玉になる」 =2012年1月11日、大阪市議会

このナラティブの意味が聞き手に理解されるのは、格差という指標によって、すべての学校の存在価値を測れ、またそのような基準で学校を価値づけることが公正であるという新自由主義の価値観がディスコースで了解されているからである。不平等を語る時に、広く人口に膾炙する格差という言葉には、それが社会悪であり、是正されなくてはならないということが前提されている。しかし学校間のちがいは、格差の問題に縮減できるようなものなのだろうか。例えばアメリカの政治議論で使われる「ちがひ」を表わす言葉には、「格差」以外に、「差異」という言葉があるが、後者の方は文化相対主義、マイノリティの政治などの文脈で、ちがひというものを、個性や文化、アイデンティティなどと結びつけて、ポジティブなものとして使われることが多い。格差がおもに経済の文脈でネガティブなものとして使われるのとは対比的である。

学校のちがひを議論する時には、格差（経済的要素に還元されるような是正されるべきちがひ）と差異（文化や歴史、個人的背景などの尊重されるべきちがひ）双方からの視点が必要かと思われるが、日本社会のディスコースの中では、「差異」という言葉よりも、「格差」の方が、圧倒的に認知され、流通していることから、教育のディスコースにおいても、新自由主義の価値観がヘゲモニーを取っていることが明らかになる。格差という視点から学校間のちがひを論じることは勿論必要だが²³、その言葉が排除するもの、つまり差異の文脈で語られるようなちがひの議論にも、目を配る必要があるだろう。格差の議論では、格差に縮減できない学校の存在意義一個々の子どもの多様なニーズ、地域の文化的、社会的、歴史的背景と学校のつながり等—は排除される。この点に関しては、次のセクションでも論じたい。

6) 「事実を子どもたちに知らしめることが、子どもに利益か不利益かなんて分からない。そこに『選択』という言葉を入れると、いい情報も悪い情報も伝えないといけないことになるので、僕は『選択』という言葉にすごくこだわっている」 =2012年2月22日、大阪市教委との意見交換会

7) 「子どもたちに自立した個人になるようなことを求める。自立、責任、努力、切磋琢磨を子どもに求めないと」 =2012年3月1日、大阪市議会代表質問

8) 「教育に限らず僕の政治哲学は、まずきちんと条件は整えてあげる。お金のあるなしにかかわらず、同じ競争の土俵に乗れるようにしっかり土俵は作る。しかしその後は、とことんまで自分の力で努力してほしい」 =2012年3月20日、民放番組

これらのナラティブを成り立たせているのは、競争は善であり、誰もが競争に参加することを望んでいるというディスコースの前提である。政府が競争の条件を整え、公平な競争の機会を提供すれば、社会正義が実現できるという新自由主義の価値観が顕在化する。競争のために努力することが善であり、努力はむくわれる、だから努力が実らなかったときは自己責任である。このような新自由主義的平等の正義の考え方から排除されるのは、差異の平等という概念である。

差異の平等のパラダイムでは、人々は、普遍的な人間としてではなく、それぞれにちがう背景やニーズ、社会への貢献のかたちをもった個人として社会参加するのだから、画一的な（唯一の）判断基準の競争の場を提供するだけでは、公正は実現できないと考える。すべての人を同じに扱うことが平等であり、機会の平等の保証によって公正が維持できると考える新自由主義の正義に対して、差異の平等では、社会正義の実現の射程は、機会の平等だけでなく、結果の平等にまで広がる。個人の様々な変数や背景を考慮した、より多様な選抜基準を用いることで、競争の公正を実現していかなくてはならないとする立場である。橋下氏のナラティブを成り立たせている、新自由主義のロジックやボキャブラリーが日本社会のディスコースで了解事項になっているのに対して、差異という言葉を軸にした平等概念が、まだまだ了解事

項になっていないことが、日本社会のディスコースの前提の偏りを顕在化させる²⁴。次のセクションでは、橋下政権が打ち出した「弱者のための教育バウチャー政策」を格差と差異の平等枠組みから考えてみたい。

9) 「教育バウチャーとは、小中高にかかっている公費を先に子どもたちに渡してしまうというもの。学校サイドに税を投入するのではなく、その税分を子どもに渡してしまう。そして子どもが学校を選ぶ。学校は生徒を集めて運営費をまかなう。私立も公立もなくなってきます。ある意味革命です。」
=2012年3月18日、ツイッター

小中学生の5割が就学援助を受ける大阪西成区において、今年9月から就学援助を受ける家庭を対象に月1万円のバウチャー（クーポン）が市から新たに配布され始めた²⁵。これは8)の「きちんと条件は整えてあげる。お金のあるなしにかかわらず、同じ競争の土俵に乗れるようにしっかり土俵は作る。」ということが、具体的に政策化されたのだ。しかし、ふたを開けてみれば、実際に利用している家庭は3分の1である。不足分の塾代が払えない家や子の学びに関心が向かない家庭が広がっている、と新聞では解説しているが、この数字をディスコースの前提から考察してみたい。

日本において多くの子どもたちが塾に通い、より難易度の高い学校への進学を目指すのは、努力していい学校に行けば、将来高い社会的報酬を得ることができる、というメリトクラシーがディスコースの了解事項になっているからである。またそのようなメリトクラシーを支えるのは、自分たちが教育を通じて参加する競争は公正であり、善であるというディスコースの前提である。もし、西成区においても、同じ価値観がディスコースで前提されていたならば、教育バウチャーはもっと成功しなくてはならなかったはずだ。つまり、西成区における教育の問題が、格差だけの問題であり、お金の問題に縮減されるような問題であったならば、もっとたくさんの家庭が教育バウチャーを使っていたはずである。

しかし、そうではなかった。多数の人が教育バウチャーに関心を示さなかつ

たのは、多数の人がメリトクラシーを信じていない、もしくはその蚊帳の外にいるということを物語っているのではないか。西成区には、新自由主義の価値観を共有していない、メインストリームとは違うサブディスコースがあるということだ。メインストリームのディスコースが前提にする幸せやあるべき姿とは違う世界観を格差と見るか、差異と見るか。この論考の射程外とするが、議論を深めなければならないだろう。

いずれにしても、西成区において、教育バウチャーという金銭的援助がさほど効果をみせなかったことが以下のことを明らかにする。それは教育の問題が、格差には還元できない複雑なものであり、新自由主義的ディスコースの枠組みでは論じきれないということ、そしてディスコースの前提は常に何かを、そして誰かを排除するというジレンマである。わたしたちはディスコースの枠組みなしでは語れない、しかしその枠組みが、無意識のうちに排除するものに常に自覚的でなくてはならないだろう。

6. おわりに

言語がまずありきの世界で、言語的に表現し、解釈されることによって初めて存在する人間主体という世界観は、主体の不完全性、言語の限界、言語と主体の密接な関係²⁶を明らかにしてくれる。それは、「言葉を使って全てを語りつくせる」という幻想を引きはがし、「言葉によって普遍的正義や真実を導き出すことができる」という前提、「言葉という武器によって他者をかいたらすことができる」という前提を相対化する。

この論考では、日本社会のディスコースで、いかに新自由主義的価値観が普遍化されているかを、橋下氏のナラティブを成り立たせているディスコースの前提を分析することで、明らかにした。あらゆるナラティブは、ディスコースに共有された前提を必要とし、前提は排除に支えられた枠組みである限り、排除は必然である。しかし多くの場合、わたしたちは、ディスコースにある前提や常識に一体化するあまり、ディスコースが排除している他の可能性や差異に対して、あまりにも無自覚なのではないだろうか。

自己と他者をつなぐディスコースの枠組みが、何を当たり前とし、何を排

除したかについて、少しでも自覚的になることが、無意識に忍び込んでいる自分のバイアスに向き合うことを可能にし、あらゆる規制の中から生み出される私たちの「語り」に、「自由」の余地を与える契機になるのではないか。カント（1724～1804）の批判哲学が、まず人間の理性の形式と限界を明らかにすることから、理性の可能性を追求したように、言語の可能性、対話の可能性を広げるためには、言語に内在する不可能性を明らかにすることから始めなければならないだろう。

言語ゲーム一元論を生きる人間は、ディスコースに支えられたナラティブにその存在を依存する。少数派の人が、語るべき言葉を持たない、ボイスレスであるといわれるのは、言葉が欠落しているというよりは、個々のナラティブを意味のあるものとするディスコースをもたないからだ。しかしだからといって、メインストリームの人々が、常に他者から疎外されているわけではない。共有するディスコースの前提に目を向け、自分たちが排除したものに自覚的になる時、わたしたちは他者に開かれる可能性を持つ。批判的談話分析の視点は、自分（ナラティブ）の中に、そして自分たち（ディスコース）の中に抱え込んだ他者に目を向ける、貴重な契機となるはずである。他者とは、常に人間の外見をして、わたしたちの前に立ち現れるものとは限らない。それは、私たちの個々のナラティブの中に、そしてそれを成り立たせるディスコースの中に潜んでいるのだから。

¹ この論考では、構造主義とポスト構造主義を含め、構築主義という用語を使う。構築主義の理論枠組みについては、上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房 2001年を参照。

² 人間主体とは独立した言語の構造を明らかにしたソシユールのstructuralism、言語が私たちの思考を外の世界に伝達する無色透明な道具ではなく、私たちの思考を形作ることを論じたサピアウォーフのlinguistic Relativism、人間の理性の前に言語の存在を見るバフチン（1989）の言語哲学などに共通する人間の理性や思考の前に言語をとらえる視点。

³ 廣松渉 『今こそマルクスを読み返す』 講談社現代新書 2011年p33

- ⁴ 竹田青嗣『現代思想の冒険』筑摩書房 1992年 p.67にあるデリダの『グラマトロジーについて』からの引用
- ⁵ Foucault, M. *The history of Sexuality Volume I: An Introduction* (R. Hurley, Trans.) NY: Vintage 1978.
- ⁶ Anderson, B. *Imagined Community: Reflection on the origin and spread of Nationalism*. London: Verso 1991.
- ⁷ Goffman, E. *The Presentation of Self in Everyday Life*. New York: Anchor Books 1959.
- ⁸ 論理哲学論においてウィトゲンシュタインは5.6「私の言語の境界が、私の世界の境界を意味する」5.63「私とは、私の世界のことである。[小宇宙。]」5.632「主体は、世界のうちの属するのではない。それは、世界の境界なのである。」と記述し、言語と、言語によって構築された世界（私）を取り結ぶものとして主体を捉えている。ウィトゲンシュタイン 論理哲学論 山元一郎 訳 中央公論新社 2001年 参照
- ⁹ 黒崎宏『ウィトゲンシュタインが見た世界』新曜社 2000年
- ¹⁰ 筆者の立場は決してナラティブの能動性を否定しているわけではない。ナラティブの受動性と能動性を語る形式は、相いれないものである故、受動性（構造）について記述するときは、能動性（現象）は括弧に入れ、能動性について語るには、受動性をひとまず棚上げしておかなくてはならないと考える。しかしそれは、他方を否定するということではない。このあたりの議論は、この論考の射程外とするが、柄谷行人『トランスクリティーク カントとマルクス』岩波書店 2010年を参照。
- ¹¹ Fairclough, N. *Critical Discourse Analysis. London and New York*: Longman 1995.
- ¹² Schiffrin, D. *Approaches to Discourse*. Cambridge: Basil Blackwell 1994.
- ¹³ Holmes, J. *An introduction to Sociolinguistics 3rd edition*. Essex: Pearson Educational Limited 2008.
- ¹⁴ 談話分析の詳しいアプローチについては、林宅男 編『談話分析のアプローチ 理論と実践』研究社2008年を参照
- ¹⁵ Norman Fairclough, *Analysing Discourse Textual analysis for social research*, London: Routledge 2003, p.20（日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳『ディスコースを分析する社会研究のためのテキスト分析』くろしお出版 2012年）
- ¹⁶ 同上p.66
- ¹⁷ 同上p.5 フェアクラフは、「グローバリゼーション」「モダニティ」「消費社会」など

ではなく、「新資本主義」という言葉を用いる理由について、資本主義は、大きな変容を乗り越えて、構造再編成を行いながら継続していくという認識、現在の資本主義の最新の変化を表すという点で最もふさわしいと考えられるためとしている。

¹⁸ 同上p18

¹⁹ スラヴォイ・ジジエク 『ポストモダンの共産主義』 栗原百代訳 筑摩書房 2010年 p.15

²⁰ フェアクラフ (2003=2012) は、語用論や意味論の文献で使われる、前提要件 (presupposition) 内含 (entailment) 含意 (implicature) といった区別は用いず、すべてを包括するものとして、前提 (assumption) を、使っている。

²¹ 『橋下語録』 産経新聞大阪支部2012年

²² 例えばアイザイア・バーリンは、開かれた選択肢の中から選ぶ能力を持って行う「積極的自由」と外的要因によって妨げられないという意味で選択が可能な「消極的自由」を区別している。アイザイア・バーリン 『自由論』 みすず書房 新装版 2000年 参照

²³ 文部科学省の調査では、就学援助を受けている小中学生は2011年で156万人あまり。学力が保護者の収入とほぼ生比例するという調査結果もある。朝日新聞2012年12月8日

²⁴ 例えばアマルティア・センは、平等の問題を、財の再分配そのものではなく、お金を使って個人が実現できる選択肢の幅から考えていく。センの議論は、豊かさの問題が、お金の縮減されえない複雑性を抱えていることを明らかにする。アマルティア・セン 『貧困の克服』 大石りら訳 集英社新書 2002年

²⁵ 朝日新聞 2012年12月8日p.38

²⁶ 主体と言語の関係性、主体の不完全性の議論については、精神分析、特にジャック・ラカンの主体概念において詳しく論じられている。